



後期露伴論-俗語小説の表現と思想-

川西, 元

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

1999-03-31

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲2023

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1002023>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・（本籍）	かわにしはじめ 川西元	（兵庫県）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）	
学位記番号	博い第7号	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当	
学位授与の日付	平成11年3月31日	
学位論文題目	後期露伴論 —俗語小説の表現と思想—	

審査委員	主査 教授 林 原 純 生	
	教授 野 口 武 彦	教授 池 上 洵 一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は三部全五章で構成され、第一部は「小説の哲理」と題し、「望樹記」と「幻談」の作品研究に二章が当てられ、第二部は、「歴史叙述としての創作」のもとに「蒲生氏郷」と「雪たゝき」の二つの歴史小説の意味が考察される。第三部は「露伴の宇宙」として第五章「連環記」論が収められ、後期露伴文学研究の結論となる。以下、各章の要旨を述べる。

本論文の意図は序文に要約されている。従来のように「運命」に露伴文学の頂点を見るのではなく、それ以後の、「望樹記」から露伴最後の小説となる「連環記」に至る過程に、露伴文学の本質と到達点を見ることであり、その際、後期の露伴文学の重要な諸要素として、「芭蕉七部集」の考証作品とは異なる「俗談平話」性、特に華厳思想との間に見られる仏教思想との関係、江戸の歴史叙述や考証とのつながりをあげ、特に後期露伴文学において〈江戸〉が果たした役割の重要性を指摘する。

第一章は、「運命」の翌年（大正九年）に発表され、後期露伴文学の出発点とされる「望樹記」の作品論が主となる。本章では、冒頭部分に登場する老婆の日常生活の描写が二宮尊徳から始まる「報徳思想」に基づくことを指摘する。さらに、「樗」についての語り手の連想、「秦」、「樗」から「樗樹」（とねりこ）に至る過程を分析し、この語り手の連想過程が李時珍の『本草綱目』の「秦皮」の項に拠っていることを論証する。本草書の知識、「樹」をめぐる文明批判、「樗樹」の字義考証から、関東平野の人工的に作られた河川の問題に言及する語り手の思想を分析して、本作品の、読者を新たな価値の発見と認識に導くに至る仕組みが、「江戸」に始まる露伴の知性の質と密接な関係があることを、本章は示す。

第二章、「幻談」論では、釣り人が偶然に釣り竿を握った溺死者に会う挿話を書いたにすぎないこの作品について、江戸の〈釣り〉の「風流性」が、近代社会の功利性に対置されているとして、露伴の文明批判の視点を再び指摘する。さらに露伴文学がいかにも水を通しての他界性に関わっているかを考察し、露伴文学においては「水」は、読者の想像力を空間的に開放する重要な舞台装置となっていたとする。その際、「連環記」で顕在化する仏教思想の存在を本作品に見る。

第三章「蒲生氏郷」論は、前二章が、露伴文学を、その空間的な広がりにおいて論じたのに対して、

時間軸をもとにした露伴の歴史小説の方法を検討する。その基礎作業として本章は、幸田露伴が読んだであろうテキストを網羅的に調べ、同種の数多いテキストと作品「蒲生氏郷」との校異を通して、前半部の典拠とされる「藩祖実録」、後半部の「氏郷記」が、『史籍集覧』と『大日本野史』という二つの叢書掲載本のものであることを実証する。それらのテキストと作品「蒲生氏郷」等との修辭的異同から、後期露伴の歴史小説の叙述方法の特徴、歴史小説としての時間の特徴的な構造と、それがどのように歴史的な現場のリアリティをもたらしただかを述べる。

第4章は、「雪たゝき」論にあてられ、この小説の多義性の意味を考察する。後期の露伴が獲得した「俗語」は、この小説において最もその自在性を得ているとして、露伴文学における本作品の占める意味を評価する。歴史小説としては、露伴が同時代の三浦周行等の堺港研究を参照したことを指摘し、応仁の乱の末期という殺伐とした時代背景を持つこの作品は、堺という都市の歴史性への視点を内在化することで、読者の想像力に訴えうる複雑で多義的な意味空間となったとする。また、本章は、そのような多義的な作品世界が、どのように昭和十年代という時代に対する批判的機能をはたしえたかについても論究し、露伴文学の同時代性への注目を促す。

第五章は「連環記」論として、露伴最後の小説「連環記」を論じる。「法縁微妙、玉環の相連なるが如し」(大江匡房『続本朝往生伝』)という言葉に触発されたとする、「連環記」という露伴独自の小説方法のモチーフに華嚴思想を見、また、作品の深層テキストとして『大日本史』の存在を指摘して、説話世界を素材としながら、露伴文学にとって〈江戸〉がいかに本質的なものであったかを述べる。本章では、特に、「連環記」の成立に関して、その『大日本史』を初めとして、従来指摘されていなかった多くの参照史料(「黒谷上人燈録」等)を明らかにし、「連環記」成立の基盤の広がりを見出す。本章はその題に「露伴の宇宙」とあるように、本論文の結語として、「江戸」に起源をもつ露伴文学の近代を越える広がりを「宇宙的」として構図化し、「運命」以降の露伴文学の総括的な位置づけを行う。

論文審査の結果の要旨

本論文は表題にあるように、後期の露伴文学という研究課題を設定して、幸田露伴の大正九年以降の表現世界を、思想から語彙の次元にいたるまで多角的に精査したものである。従来の評価のように「運命」に露伴文学の頂点を見るのではなく、それ以後の、「望樹記」から露伴最後の小説となる「連環記」に至る過程に、露伴文学の本質と到達点を見るものであり、その際、本論は後期の露伴文学の重要な諸要素として、「芭蕉七部集」の考証作品とは異なる「俗談平話」性、特に華嚴思想との間に見られる仏教思想との関係、江戸の歴史叙述や考証とのつながりをあげ、後期露伴文学の思想的側面と小説方法を各作品について検討する。

本論文は三部全五章で構成され、第一部は「小説の哲理」と題し、「望樹記」と「幻談」の作品研究に二章があてられ、第二部は、「歴史叙述としての創作」のもとに「蒲生氏郷」と「雪たゝき」の二つの歴史小説の意味が考察される。第三部は「露伴の宇宙」として第五章「連環記」論が収められ、後期露伴文学研究の結論となる。以下、各章の要旨と本論文の成果を述べる。

第一章は、「運命」の翌年(大正九年)に発表され、後期露伴文学の出発点とされる「望樹記」の作品論が主となる。本章では、冒頭部分に登場する老婆の日常生活の描写が二宮尊徳から始まる「報徳思想」に基づくことを指摘する。さらに、「樗」についての語り手の連想、「秦」、「樗」から「樗樹」(とねりこ)に至る過程を分析し、この語り手の連想過程が李時珍の『本草綱目』の「秦皮」の項

に拠っていることを論証し、そのような表現は露伴文学の保守性を表すものではなく、むしろ、そこに後期露伴文学の近代的な意義があるという重要な指摘をする。本草書の知識、「樹」をめぐるの文明批判、「樗樹」の字義考証から、関東平野の人工的に作られた河川の問題にまで至る語り手の思想を分析して、本作品の、読者を新たな価値の発見と認識に導くに至る仕組みが、「江戸」に始まる露伴の知性の質と密接な関係があることを、本章は示す。

第二章、「幻談」論では、表面的には、該博な知識に基づいた釣談義が随筆風に展開され、釣り人が偶然に釣り竿を握った溺死者に会う挿話を書いたにすぎないこの作品について、江戸の〈釣り〉の「風流性」が、近代社会の功利性に対置されているとして、露伴の文明批判の視点を再び指摘する。さらに露伴文学がいかにか水を通しての他界性に関わっているかを考察し、露伴文学においては「水」は、読者の想像力を空間的に開放する重要な舞台装置となっていたとする。その際、「連環記」で顕在化する仏教思想の存在を本作品に見る。

第三章「蒲生氏郷」論は、前二章が、露伴文学を、その空間的な広がりにおいて論じたのに対して、時間軸をもとにした露伴の歴史小説の方法を検討する。その基礎作業として本章は、幸田露伴が読んだであろうテキストを網羅的に調べ、同種の数多いテキストと作品「蒲生氏郷」との校異を通して、前半部の典拠とされる「藩祖実録」、後半部の「氏郷記」が、『史籍集覧』と『大日本野史』という二つの叢書掲載本のものであることを実証する。それらのテキストと作品「蒲生氏郷」等との修辭的異同から、後期露伴の歴史小説の叙述方法の特徴、歴史小説としての時間の特徴的な構造と、それがどのように歴史的な現場のリアリティをもたらしただかを述べる。

第4章は、「雪たゝき」論にあてられる。露伴の最晩年の小説「雪たゝき」(昭和14年)を論ずる際、花田清輝「男の首」(「群像」昭和32.5)を問題提起の契機として、この小説の多義性の意味を考察する。後期の露伴が獲得した「俗語」は、この小説において最もその自在性を得ているとして、露伴文学における本作品の占める意味を評価する。歴史小説としては、露伴が同時代の三浦周行等の堺港研究を参照したことを指摘し、応仁の乱の末期という殺伐とした時代背景を持つこの作品は、堺という都市の歴史性への視点を内在化することで、読者の想像力に訴えうる複雑で多義的な意味空間となったとする。また、本章は、そのような多義的な作品世界が、どのように昭和十年代という時代に対する批判的機能をはたしえたかについても論究し、露伴文学の同時代性への注目を促す。

第五章は「連環記」論として、露伴最後の小説「連環記」を論じ、幸田露伴の文学の到達点と、露伴文学の思想と小説方法との関係を解析する。「法縁微妙、玉環の相連なるが如し」(大江匡房『続本朝往生伝』)という言葉に触発されたとする、「連環体」という露伴独自の小説方法のモチーフに華嚴思想を見、また、作品の深層テキストとして『大日本史』の存在を指摘して、説話世界を素材としながら、露伴文学にとって〈江戸〉がいかにか本質的なものであったかを述べる。本章では、特に、「連環記」の成立に関して、その『大日本史』を初めとして、従来指摘されていなかった多くの参照史料(「黒谷上人語燈録」等)を明らかにし、「連環記」研究への貴重な寄与となっている。本章はその題に「露伴の宇宙」とあるように、本論文の結語として、「江戸」に起源をもつ露伴文学の近代を越える広がりをも「宇宙的」として構図化し、「運命」以降の露伴文学の総括的な位置づけを行う。

以上のように、本論文は、後期の幸田露伴の文学への多面的な研究であり、複雑な様相を見せる露伴文学を、その細部において緻密な調査を重ね、先行文献と照合し、その成果を新たに統一的な視点において論じ、近代文学における露伴文学の思想的・文学的な解明と位置づけを試みたものであり、露伴文学の研究史上に注目すべき知見を加えた論である。本論によって解明された点、研究上の方向を定められた点はきわめて多い。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は、川西元が博士（文学）の学位を授与されるに足るとの結論で一致した。